

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 2 年 山本 楓

私は、京都市内の中学校で JFC(Japanese-Filipino Children)の学習支援ボランティアを行っており、また日本で生活するフィリピン人女性についての講義を受けてきた。このように日本で学ぶ中で、私がサポートしている子供達が生まれ育った場所を実際に訪れたい、そして来日するフィリピン人女性の考えを聞きたいと思い 2 月 13 日から 20 日までの一週間、マニラでの研修に参加した。研修では、フィリピン大学をはじめ、CFO(Commission on Filipinos Overseas)や、来日予定のフィリピン人女性・JFC を支援する NGO、福祉施設、アジア開発銀行など様々な施設を訪問することができ、日本とフィリピンの間に存在する問題を多角的に見ることが出来た。この研修で、私は予想以上の貴重な経験をしたと言えると思う。

私は、この研修に応募する前、JFC 達は日本で生活するより、フィリピンにとどまり生活の方が幸せなのではないかと考えていた。なぜなら、学習支援ボランティアを行う中で JFC が克服しなければならない数々の困難を目の当たりにしていたからだ。それは単に言語だけの問題ではなく親との関係性、社会の JFC へのまなざしなど異なる文化の中で進学し就職する中で困難は多岐にわたるものだった。そして、JFC の母親達の労働環境も過酷である。賃金は十分でなく、不当な契約である場合も多い。このような事を学んでいたため、フィリピンにとどまった方が幸せなのではないかと考えていた。しかし、実際にフィリピンを訪れ、様々な視点からこの問題を捉えることが出来る様になり考えが変わった。

フィリピンに到着して最初に驚いたのは、日曜日公園に家族連れが所狭しとレジャーシートを並べ、たくさんの子供達が公園を走り回っているという、現在の日本ではまず見ることのできない風景だ。これを見たとき、わたしは、若者であふれているフィリピンに将来性を感じ、日本とくらべてすこし羨ましくなったのだが、フィリピンの状況を学ぶにつれ、これがある問題の大きな原因の一つであることも分かってきた。労働者が多すぎて、仕事を見つけられない人が大量に存在するのである。そして職を見つけられない女性達が職を求めて来日を希望するようであった。実際に CFO で来日予定の女性たちに現在の仕事を聞くと、仕事が無いという女性が大半であった。そして日本でしたい事を聞くと、多くの女性達が「働きたい」と答えた。

もちろん、フィリピンの職業問題はこれだけが原因ではない。ADB で伺ったお話によると、フィリピンでは第二次産業が発達していないため、職場は一部のエリートを除くとサービス業(デパートメントストアやカジノ、コールセンターやパブなどの従業員)に限られる。また、フィリピンにおける雇用は半年契約が多く、サービス業にも継続的に就くことは難しい。このような経済的理由もあって日本に来れば仕事があるのではないかと、良い暮らしをできるようになるのではないかと、簡単に考えてしまうのだと感じた。

また、実際に来日希望の女性達にインタビューしたことも非常にためになり、印象深く感じている。女性達に話を聞いていて 1 点感じた事として、彼女達が非常に楽観的であるということがある。例えば、CFO で話を聞いていると、日本語もほとんど話せず、自分が住む場所がどんな場所かのイメージもできておらず、勤務先はもちろん業種の検討もしていないのに「働きたい」としきりにのべる女性がたくさんいた。他にも、今後来日する可能性が大きいフィリピンパブで働く女性に聞き取りをおこなったところ、将来についてあまり深く考えずに職に就いていることがわかった。パブでの仕事は、売り上げが悪ければすぐクビになり、うまくいったとしても長期間つとめることは難しいが、パブを辞めた後について考えている様子はなかった。わたしは、このような女性達の様子を見て少しもどかしく思ってしまった。日本で、過酷な労働をしているフィリピン人女性について学んで来たので、今後來日する女性達には、少しでも良い仕事を見つけて、少しでも良い生活をして欲しいと思っているのに、このままでは彼女達も良い仕事を見つけれられると思えなかったからだ。来年私がまたこの研修に参加することがあれば是非この点を伝えたいと思う。

この研修では、JFC やフィリピン人女性について、フィリピンの社会、経済、歴史など様々な点から考えることができた。この研修で日本側の視点だけで考えるのではなくて、外側の視点から、それもできるだけ自分自身が海外に行き、考えること

が、非常に重要であると痛感した。今後も様々な機会があると思うので、それらの機会に積極的に飛び込み、できるだけ海外に出ようと思う。